

## 「民謡」で見る最新中国像〔Ⅱ〕

何 曉 毅

### 目 次

- I. はじめに
- II. 十人十色
- III. 役人天国
  - 3.1 官僚たちの「四つの基本原則」
  - 3.2 飲食の芸術
    - 3.21 上に政策あり、下に対策あり
    - 3.22 「タダ」が好き
    - 3.23 効果抜群
    - 3.24 飲食の鉄人
    - 3.25 困った！
  - 3.3 乗り物も身分
  - 3.4 会議の鉄則
  - 3.5 官僚の仕事
  - 3.6 官僚の心得（以上第59巻第3号）
- IV. 我即法律（以下本号）
  - 4.1 警官は金数え上手？
  - 4.2 北京の四大「不思議」
  - 4.3 原告・被告一網打尽
- V. 不倫も文明開化？
  - 5.1 投資者ランキング
  - 5.2 年寄りの生活
  - 5.3 人生のコツ

- 5.4 詐欺は常識？
- 5.5 先生は塩？
- 5.6 不倫も文明？
  - 5.61 役人の新追求
  - 5.62 結婚は誤り？
  - 5.63 道徳の乱れ
  - 5.64 愛人が多いほど恰好いい？

VI. 蛇足

IV. 我即法律

4.1 警官は金数え上手？

神奈川県警は不祥事のデパートとマスコミに揶揄されるほど最近日本の警察は不祥事が多発している。しかし、明るみに出たそれらの不祥事は、中国の警察が日常やっていることと比べると、例えば奈良県警の巡査が証拠品の韓国硬貨23枚を横領したとか、可愛いものであろう。向こうはさすがスケールの大きい国で、警察の不祥事のスケールも大きい。もっともそれらは不祥事より犯罪であるにも関わらず、何も気にせずやり放題やっているのは日本との大きな違いなのだ。

その振る舞いを庶民に言わせると次のような像になる。

抽「大鶏」、喫「小鶏」、

腰里挂着对讲機；

満嘴都是「娘個X」，

点起錢来賽會計。

「有名タバコを口にくわえ、高級料理を食べ、腰に無線機をつける；口を開けると「バカヤロウ」の連発で、金を数えるテクニックは出納係さえ顔負け。」

恰好をつけたがる警察官にしてはタバコは恰好の道具である。中国のタバ

コの銘柄は多く、軽く百を越えると思う。計画経済の名残りで各地にタバコメーカーが存在している。少し前は舶来品が高かったが、さすがに口にあまり合わないらしいから、最近国産のブランドものが人気高く、凄く値を張っている。日本と違って、タバコの値段が安いものから高いものまで、その差がざっと十数倍にもなる。例えばかの有名な「中華」という銘柄のタバコは百貨店で一箱三・四十元（500円くらい）で売られている。勿論普通の人は誰も手が出せない。警察官だって普通に考えたら手が出せないはずだ（彼らの月給では1カートンくらいしか買えない）。それでも高価なタバコを誇らしげに口にくわえている警察官をよく見かける。どう考えてもおかしい。その上地元の高級料理屋によく出入りする。これは警察官だけではない。夜、各地方の少し有名な料理屋の前に行けばすぐ分かる、駐車しているのは殆ど法曹関係のナンバーの車だ。いうまでもなく、彼らは自分のポケットマネーで飲食していることは決してない。

無線トランシーバーは今や警察の大事な商売道具の一つであるが、仕事をするならともかく、口にくわえているタバコ、そして高級料理屋に出入りする事と合せて考えると、そんなものを持っても見栄っ張りか、民衆を威嚇するかぐらいにしか見えない。

そして言葉が汚いのはどこの国の警察でも同じだと思うが、問題はそれが誰に対してかということだ。中国の多くの警察官、特に地方の警察官は法律をあまり知らない、若しくは知ろうとしない。とにかく自分が一番偉いと思っているから、自分の言うこと、やることすべて思いのままだ。目障りだと思ったら取り敢えず捕まえて尋問すればいい。「尋問」だから優しく話を聞くのではない、拷問で自供を強要するのは日常茶飯事で、汚い言葉くらいはむしろ優しい方である。

ところでなぜ警察官は金を数える事が上手だというのだろうか。この「民謡」では毎日金を取り扱っている出納係より上手いと表現している。つまり彼らは出納係より金に慣れているからだ。数年前日本でも報道されたが、万里の長城を見学に行った旅行客を乗せているバスが沿道の警察官に見覚えの

ない交通違反をしたと言われ、罰金を言い渡された。後で明らかになったが、その月のボーナスの資金がないから警察署長が部下に金を工面しろと命令した。命令を受けた末端の警察官が観光バスに目をつけ、万里の長城に行くバスの必ず通る道で交通違反の取り締まりを始めた。それで金を巻き上げて上に貢いだのだった。

今や多くの地方の町では警察署は地方政府の役所より立派。私のよくお世話になっている派出所でもお巡りさんは一人一人部屋を持っており、その内装と調度品はホテルなみである。もちろんそれは政府の予算でそこまで立派に造ったわけではない。資金は基本的に派出所が工面したのだ。その多くは罰金であることは言うまでもない。

組織がそこまでやったら、個々の人も負けることがないのは常である。だから警察官に罰金をとられても多くの場合領収書を貰えない。領収書を要求するなら態度が悪くと言われて罰金額を倍に上げられる、或いは殴られることをまず覚悟しなければならない。領収書が出ない罰金の行方は想像できるだろう。しかもこれはあくまで手取り早く稼ぐ方法の一つであり、唯一の稼ぐ方法ではないことはみんな知っている。毎日金を数えたらそのテクニックもはんぱじゃないだろうと、普通の人々は想像しても無理はない。

#### 4.2 北京の四大「不思議」

北京では最近次の「民謡」がはやっている。

胡同里轎車開得快；

小巴也沒有公共快。

早点攤主尽「老外」；

流氓也沒有警察壞。

「車は大通りより路地の方が早い；乗り合いタクシーは路線バスより遅い；朝の屋台主はみんな「外人さん」；悪さではならず者も警察に顔負け。」

中国はいま自動車が急激に増えているが、道路や信号などインフラの整備がその増加に追いつかず、加えてドライバーと歩行者の交通マナーが悪く、

どの町も大変な交通混乱に陥っている。北京でも大通りは年中渋滞している。そこで一部のタクシーなどは信号が多く渋滞の酷い大通りを避け、信号が殆どない路地を走るようになった。いままで穏やかな生活の場だった路地は突然自動車が突き走ることになると、住民にとってはほとんど迷惑なのだ。

交通に関してもう一つ不思議な事があるのだ。もともと北京市民の足は市営バスだが、サービスが悪く、定刻通りに運行しないなど、評判が良くない。そこで乗り合いタクシーが登場した。十数人乗りのワゴン車を線路バスのように運行して、乗り降り自由で、運賃が少し高いが、利便性で市民に歓迎された。ところで中国では長続きすることが少ない、歓迎されたはずの乗り合いタクシーが、いま嫌われ始めた。増えすぎたので、客の奪い合いが起り始めた。そして乗っているお客さんが少ないとなかなか動かない。ゆっくり運転して、一人でも多くの客を乗せて収入を増やしたいのだ。でもすでに乗っている人はたまらない、安い市営バスが横切って走り去るのを見送るしかないのだ。しかもお客を奪い合うため、全く交通ルールを守らず、乗りそうな人を見つければ、停車禁止など関係なくすぐ止めてしまう。本来早くて便利はずの乗り物が悪名高い市営バスより悪名高くなってしまった。もっとも、今は市営バスも少し改善してきた。

北京は首都だから、市民のプライドは地方に比べて高い。失業しても3Kの仕事嫌がる。そのため、第三産業、特に屋台など飲食業は殆ど地方から上京した人がやっている。中国には厳しい戸籍制度があるから、地方から上京した人はいくら北京市で仕事して、生活して、税金を納めても北京市民にはなれない。そのためいくら頑張っても北京の人から見れば「よそ者」である。「老外」という言葉は日本語の「外人」のようなニュアンスで、一般的には外国人を指すが、この場合、北京の人々は地方から来た人に対する揶揄的な言葉として使っている。

前の三行は実は前置きにすぎない、この「民謡」の一番の核心は最後の文句なのだ。「流氓也沒有警察壞」——現在の北京で何より不思議なのは警察官が酷いのだ。これはもちろん北京だけの話ではない。むしろ地方に行けば行

くほど酷い。自我中心・罰金崇拜・暴力主義・違法拷問・職権乱用・法律無視……数えたらきりが無い。その振る舞いはまるで昔の山賊である。だから「過去土匪在深山，如今土匪在公安」（むかしならず者が山にあり，今日ならず者は公安にある）と象徴されるように，民衆の警察に対する評価はならず者以下なのだ。もともと市民の安全・社会の安定を守る存在のはずの警察が，市民を苦しめる存在になったと人々は感じ始め，最大の摩訶不思議である。

#### 4.3 原告・被告一網打尽

警察官など制服組に関する「民謡」では次のようなものも全国的にはやっている。

戴上大蓋帽，  
東西随便要；  
喫了原告喫被告，  
捉個「野鷄」泡一泡。

「制服を身に付ければ，ものを貰い放題；原告・被告両方を食い尽くし，街娼を掴まえて楽しいひとときを過ごす。」

中国の警察・検査・裁判・衛生取り締まり・税務など，少し実権のある役所はみんな制服を着ている。しかも制服の管理はとてもアバウトで，関係者は勤務中だけではなく，年中制服姿である。なぜ彼らは24時間，360日制服を好んで着るのか？それはもちろん制服にはたくさんの有利なところがあるからなのだ。

一つにはいうまでもなく自分の洋服代を節約できる。

もう一つ，実は最も重要な理由は，その制服姿にあるのだ。つまりその姿だけで利益になるのだ。例えば衛生取り締まり官は制服姿のままに店に入って食事をすると，何も言わなくても店主がおまけしてくれる。税務官はそのままの姿で自由市場で買い物すると，屋台主は競って彼らに物を差し出す。差し上げないととにかく言い掛かりをつけられた時に後が怖いからなのだ。警察はもっと質が悪い。彼らは権力が大きい分，誰もが怖がっている。例え警

察服を着ている人に何かいわれて、不審と思って警察手帳を見せてとお願いしたらこれが態度悪いと見なされ、手錠を掛けられるかもしれないのだ。

鄭州鉄道警察の警官による拷問致死事件は典型的な例である。カモを仕入れて駅で荷下ろししている鴨商人に、この警察官の奥さんはカモをよこせと迫る。日頃ご主人の七光りで何でもただで手に入れたためか、当たり前にくれると思ったが、2人の鴨商人は彼女のことは誰であるかを知らなかったため、差し上げなかった。そこで警察官姿のご主人の登場だ。彼は鴨商人を威嚇し、鴨商人も引かなかったので言い争いになった。自分が制服姿だから警察官であることが分かるはずなのに、反抗するとは？普段誰一人として警察官の自分に反論したことがあるのか。彼にしてみれば許すことができない、だから「公務執行妨害」という罪で鴨商人らに手錠をかけ、貨物列車に乗せて拷問し始めた。鴨商人は命の危険を感じて列車から飛び降りたが、即死してしまった<sup>28)</sup>。

同様のことが昆明市でも発生した。2000年8月22日、警察官は自由市場で拳銃を数発撃って、1人を死亡、4人を重傷させた。奇しくも原因は同じで、奥さんの商人との言い争いに、警察官のご主人が加わって事件を起こした<sup>29)</sup>。

人が死んだので事件は明るみに出て、当事者の警察官は逮捕若しくは裁判に掛けられたが、もし事件にならなかつたらもちろんいまでも警察官のままである。しかし人々は事件そのものより事件のきっかけが気になる。警察官の奥さんという身分だけで、なぜいとも気軽に人の商品を要求するのか。ご主人の七光りで日頃こういう行動に慣れたからというほか説明できない。警察官の親類でもこの威張りぶり、警察官自身ならどのくらい威張るか察知できるだろう。

被告を食い尽くせば原告を食い尽くす話は前も説明したのでそこを参考にすればいいが<sup>30)</sup>、「捉個「野鷄」泡一泡」(街娼を掴まえて楽しいひとときを

28) 『中華人民共和國最高人民檢察院公報』1998年第3号・案例紹介「劉洪力違法拘禁案」

29) 「昆明一民警鬧市開槍殺人」、『華商報』2000年8月24日

30) 拙著『「民謡」で見る最新中国像〔Ⅰ〕』、『東亞經濟研究』第59巻第3号 p.80～p.82

過ごす)も中国独特の現実を物語っている。

新中国では売春などすべてが禁止され、80年代まで普通の男女関係でも厳しかった。まして風俗とかポルノとかはもちろん禁止である。この建前はいまでも崩していない。古典小説中の名作である『金瓶梅』は性描写があるため、いまでも発行禁止にされている。一番新しい情報では上海の新人作家が出版した『上海寶貝』(上海ベイビー)という小説が過激な性描写が多いから、「低俗ポルノ」と見なされ発禁処分にされた<sup>31)</sup>。しかし改革開放以来、外資よりも早く入ったのは実はポルノ物であった。国内の風俗産業も雨後の竹の子の勢いで現れ始めた。当局はもちろん見過ごせない、厳しく取り締まっている。それを実行するのは当然警察である。

中国は「人治」社会であるため、すべての取り締まりには厳格な基準がない。風俗の取り締まりももちろん基準が曖昧である。言い換えれば警察の思うままに取り締まることが出来るのだ。その気になれば夫婦が深夜の道路でキスするだけでも拳銃で撃つ<sup>32)</sup>；したくないなら(或いは関係者かも)どんな違法な店でも取り締まらない。むしろ積極的に利用するのだ。

2000年7月8日、雲南省元陽県司法局の副局長と新街鎮の司法委員会の党の副書記ら3人が酒を飲んで、深夜にも関わらず民営の旅館に押し掛けてホステスによる特別なサービスを強要した。たまたまここは普通の旅館でその類のサービスがないと受付の人が答えると、拳銃を振る舞いながら殴る蹴るなど、受付の人に暴力を振るった挙げ句、部下を呼んできてホテルの従業員を無法にも逮捕させた<sup>33)</sup>。どこかで人の金で飲み食いして、2次会3次会は風俗、これは彼らのいまのスタンダードかもしれない。

積極的な利用法のもう一つは街娼を放し飼いし、稼ぐ道具にすることだ。西安電子科技大学のある学生が夏休みで四川省にある田舎の実家に帰り、あ

31) 『朝日新聞』2000年5月4日の報道による。しかしのちにその作品を読んだが、ポルノらしいところを見つけられなかった。

32) 「與老婆親昵竟挨刑警四槍」、『華商報』2000年8月15日の報道によると、遼寧省のある夫婦が夜の街頭でキスをしているとき、私服の警官に拳銃で4発撃たれた。

33) 「司法局長政法書記旅館要小姐遭拒絕持槍毆打服務員」、『華商報』2000年8月8日



る日近くの町に靴を買いに行ったところ、その町の警察に買春の容疑で逮捕され、拷問された。心配した家族が訪ねにいったが、面会を許されず数日間毆られ山に捨て去られた。見つけたときはすでに瀕死状態だった。ではなぜこれほど酷い目に遭ったのか？この田舎町に警察官たちが放し飼いでいる売春婦は何人もいる。警察官は彼女たちに男を誘惑させ、それから買春の容疑で男を逮捕して、保釈金などの名目で金を巻き上げるのだ。警察が怖いし、社会的な地位及び家庭のことも考えなければならないから、売春婦に買春したと言われたら殆どの場合、大人しく警察にお金を上納しなければならない。この純粋な学生は自分が潔白だから認めなかったのもそこまで毆られ、あわや命を落としかけたのだ<sup>34)</sup>。この類の報道はよく新聞の社会面を飾っている。

## V. 不倫も文明開化？

20年以上に及ぶ改革解放は中国社会のあらゆる方面に大きな変化をもたらした。その実態を「民謡」で見てみよう。

### 5.1 投資者ランキング

株は資本主義のアクという考えは中国では遠い昔のお伽話になっている。今はチベット高原のラサにすら証券会社ができています。人々が証券会社のホールに群がって、株価の表示ボードを真剣に見つめる。話題も自然に誰が株で儲けた、誰が株で大損したなどばかりになっている。しかしどんな時代でも、どんなことでも、犠牲者はいつも庶民である。

中国で株に群がっている人々はおよそ次の四種類に分けられる：官僚（権力者）、証券商、大口投資者、小口個人投資者。庶民はその人たちを次のように見ている：

一等股民是公僕，公司登門送内股；

二等股民証券商，巧立名目収大洋；

34) 2000年7・8月の「華商報」の一連の報道による。

三等股民大戸室，導演牛市和熊市；

四等股民遊擊隊，拼死拼活掙小慧

「一等の投資者は奉仕者で，企業から上場前の株を貰う；二等の投資者は証券会社で，巧みに名目を作って手数料を取る；三等の投資者は大口で，相場を自ら操る；四等の投資者は『ゲリラ』で，懸命に小銭を稼ぐ。」

株で一番儲けているのはやはり「公僕」（幹部役人）である。特に企業を管理・規制する機関の官僚（幹部）が一番儲け易い。リクルート事件を思い出せば話が早い。中国は企業に対する規制がまだまだ多い，その規制を何とかしたいなら上場前の株を主管役人に差し上げる。或いは受注に絡む場合も当局の権力者に株を差し上げると確実なのだ。このようなインサイド取引は投資者といえるかどうかはわからないが，ぼろ儲けするのは確かであり，普通の人は指をくわえて眺めるしかないのだ。

庶民から見れば，証券会社も旨い汁を飲んでいいる。会社を作るだけで，投資者が売ろうと買おうと関係なく手数料とか，情報料とか，いろんな名目で金を取っている。勿論誤解もあるが，店を開いて座っただけで稼げるので，こつこつ働く庶民から見ればこれ以上おいしい商売はないじゃないか。

中国の証券会社はある金額以上を投資している投資者に専用のVIPルームを準備している。大口投資者たちは毎日そのようなVIPルームで，高価な飲み物を飲みながら，パソコン画面の株価の動きを見て取引している。質の悪い連中は短期間に大金を動かして相場を操作し，暴利を稼ぐのだ。このような大口投資者の中には無断で会社の資金，若しくは公金，酷い場合教育費，貧困救済費，災害救援資金まで流用する人もたくさんいる。大儲けしたらともかく，うまくいかず大損して真相がばれてしまうものも後を絶たない。

中国の町でよく人の集まりを見かける。たくさんの人がある店の前に群がって，何かを見て，心配そうに近くの人と話しているなら，そこは間違いなく証券取引所である。その群がり小口投資家たちである。お父さんのスズメの涙くらいの貯金，お母さんのタンス預金，奥さんの実家から工面した資金，自分の失業手当——ありとあらゆる金を掻き集め，一攫千金を夢見て，ここ

に集まった。しかし正しい情報を手に入れる手段がなく、投資するノウハウももちろんない。とにかく証券取引所の前に行き、株価ボードを眺め、隣の人から情報を聞き出す。それを判断材料に株を注文するのだ。結果は明らかである。それでも夢を求めて毎日通う。このような人たちを人々は「ゲリラ投資家」と呼んでいる。中には確かに儲けた人もいる。しかしインサイド取引、人為的な相場操作、企業の粉飾業績発表が横行している極めて不健全な株式市場では、このようなゲリラ的な取引で一攫千金を得るのは殆ど夢に近いだろう。

このようなゲリラ投資家から見れば、上場前株をもらえる官僚、証券会社、相場を操作する大口投資家は羨望の的でもあるし、恨む対象でもある。そして投資する資金も度量もなく、指をくわえて速く眺めている庶民がぼろ儲けた成功者を羨み、大損した失敗者を嘲笑する以外、できるのはこの中国の株取引の現状をシンプル且つ奥深く表現している「民謡」を唱えることだけであろう。

## 5.2 年寄りの生活

中国はいま猛烈なスピードで高齢化が進んでいる。上海のような大都会ではもうすでに人口の18パーセントを超えている<sup>35)</sup>。中国独特の原因で老人たちは深刻な現実と直面している。その気持ちを代弁しているのが次の「民謡」である：

青春献給党、  
老了没人養；  
本想靠儿女，  
儿女下了崗。

「青春を共産党に捧げ、年をとったら捨てられる。子供に頼りたかったが、子供もリストラされた。」

いま中国の60歳以上の年寄りとは新中国と運命をともにしてきた。日本の年

35) 『中国統計年鑑・1999』・中国統計出版社・1999年

寄りたちが高度成長を支えたのと同じように、まさに青春のすべてを新中国の国家建設に捧げたといえる。日本は早くから年金制度が整備され、年を取っても年金で生活できる。しかし中国はいままで社会主義が建前で、すべて国が面倒を見る（最もこれは都会の勤めている人だけの話だが）ので、年金制度など社会保障を制度的には整備してこなかった。すべての面倒を見るので、給料も低かったし、住まいも社宅などで我慢してきた。定年になれば元の職場から給料の数十パーセントを年金として貰い、病気になったらその職場が医療費などを負担する。しかしいま市場経済になったので、国有企業と言われても経営不振などで倒産若しくは整理縮小でリストラする企業が続出している。現役従業員の給料すら払えないので、定年退職した老人まで面倒を見ることはもっぱら不可能だ。貰えるはずの「年金」は貰えないし、給料が低かったので貯金もない。当面の生活すら問題になってしまう。それにもし病気でもしたらそれこそ途方に暮れる。

この場合、頼りたいのは子供である。しかし子供の勤めている国有企業は経営不振で倒産してしまい、頼りたい子供がリストラ若しくは失業してしまった。子供自身でも途方に暮れているので、両親の面倒を見る能力などもちろんないのだ。

報道によると、大連近くの普藍店という町で姜興隆という73才の人が病気になった。治療するのに高額の治療費が必要だが、家族には支払い能力がない。ところでこの老人は実は戦争年代の英雄で、正に青春=いのちを革命に捧げた功労者。途方に暮れた家族が老人の命と引き替えに得られたとも言える勲章7枚を105元（約1,500円）で売ってそれを治療費に充てた。のちにマスコミ沙汰になって警察が天津まで追い求めて取り戻したが、社会的な論争にもなった<sup>36)</sup>。革命の功労者までこのありさま、他の老人の現状を察知できるだろう。

因みに日本の「戦傷病者特別援護法」による援護対象への給付金に当たる中国の「革命傷残人員保健金」は最高でも年間455元（約6,000円）（これは国

36) 『為換薬、七枚軍功章売了105元』・『南方都市报』1999年12月8日

家による旧軍人への唯一の給付金で、国民党軍などの元軍人はもちろん論外、怪我がなかったものも対象外)<sup>37)</sup>。それも各地方政府の厚生福祉部門に管理されているから、途中で他に流用されてしまうことも多い。上の報道によると、姜興隆さんの町に137人の対象者がいるが、一人当たり年間44元（約600円）しか支給されていない。44元では公費で消費している役人のよく吸う「中華」という銘柄のタバコを2箱すら買えない。

所詮このような話は都会の老人、或いは戦争の功労者などのことで、農民戸籍の普通の老人にとってこの話すら存在しないのだ。彼らはもともと政府の考える社会保障の対象になっていない。

この「民謡」は短いが、都会の老人の悲惨で、無念の現実を明快に物語っている。

### 5.3 人生のコツ

中国で商売を繁盛させたい、早く昇進したい、左遷されたくない、進路を間違いたくない……それなら次の「民謡」を心得なさい。

遇到緑燈快步走，  
遇到黄燈搶着走，  
遇到紅燈繞着走，  
沒有燈亮摸着走，

「青信号の時は早く進み、黄色信号の時は一気に進み、赤信号の時は遠回り進み、信号がないときは適当に進む。」

中国で合弁などの商売をしている日本企業が一番頭を悩まされているのは効率の悪さとか、従業員の労働意欲とかではなく、実は政策の変化の早さである。政策が猫の目のようにグルグル変わるので、ついていくのが大変だ。中国人は慣れっこだから、この「民謡」を歌うようにどんな変化にも対応できる対策を準備しているが、日常決まったルールに従って事を運ぶのになれ

37) 『中華人民共和國國務院公報』1999年第34号によると、傷残のレベルによるが、最低でも年間195元（約3,000円）がある。

ている外国の企業にとっては戸惑うばかりである。例えば1999年中国政府は輸出するはずの加工貿易品が国内に横流したことに頭を悩まし、突然10月1日付けで加工貿易保証金台帳制度を施行し、輸入原材料で加工を行う企業に多額の保証金を事前に支払うように命じた。営業資金の増大で経営を圧迫しかねない日本の進出企業が悲鳴を上げた。普通政策だから一部の企業が悲鳴を上げては仕方がないだろうが、そこは中国、日本企業の申し立てにあっさり白旗をあげ、11月に現金以外でも可、12月にまた条件は緩和され、2000年1月になると銀行保証も認め、5月に外資企業なら保証金は半分で結構だと猫の目如し、何回も政策を変えてしまった<sup>38)</sup>。

しかし中国の企業などはどのように対応策を準備していただろう。それはこの「民謡」が歌っているコツである。つまり政策が変わる事を前提にすべてのことを考える。これは企業だけのことではなく、中国のすべてのことに当てはまるのだ。

50年間、中国はたくさんの国及び国際機関との間に数え切れないほどの協定などを交わした。その数え切れないほどの協定でも中国政府が一方的に破ったことはない。しかし国内政策では、いとも簡単に変わるのだ。つまり自国民との政策協定は悉く一方的に破っている。破っても国民に対して何の説明もしないし、間違っても謝りもしない。政治運動だけでも何回行われたことか。右を批判したり、左を批判したりして、政治の船に乗り間違えと酷い目に合ってしまう。最近まで建国に貢献した高級幹部たちは周恩来以外、被害を受けたことのない人は皆無に近い。革命の功労者で、高級幹部すら生きていくのは大変だから、普通の役人や、庶民はもっと大変である。民主主義でない国は自国の国民をここまでバカにするのかと、改めて認識した。

しかし国民はバカではない。彼らはしっかり見えていて、しかも対応策を常に考えているのだ。いわゆる「上に政策あり、下に対策あり」(上有政策、下有対策)。だから政策的にいま有利と思えば素早く反応し、もっと有利にしてしまう。ちょっとでも風向きが変わると感じると(取り締まるとか)、一気に

38) 『日経新聞』など1999年10月から2000年5月の報道によるまとめ。

進んで、利益を確保するのだ。そして全く駄目になったら方法を変えてやるしかない。もちろん政策が不明瞭の時は有利に解釈して利益を上げる。とにかく待たない。待っても有利になるとは誰も保証してくれないのだ。

#### 5.4 詐欺は常識？

「誠実」は中国では古くから美德として大事にしてきた。「言必信，行必果」（有言実行）、「至誠如神」（至誠は神の如し・『中庸』第24章）などの言葉が示したように、「誠実」は常に人々の行動基準の一つであった。商売にしても、「酒香不怕巷子深」（いい酒は宣伝しなくても人が来る）の諺があるように、正直でいい物を作れば必ず認めてくれる。しかしいまの中国はどうだろうか。

要想發大財，  
錢從假貨來，  
撈得幾十萬，  
頂多判兩年。

「儲けたいなら、偽物を作れ。数十万を荒稼ぎして、掴まえられても2年くらいの刑だ。」

拝金主義の蔓延で、誰もが金持ちになりたい。でも簡単にできることではないのは自明の道理で、しかも真面目にやるなら、例え企業を興しでも技術力、市場の開拓など、大変な努力と時間がかかる。「賢い人」は近道を考えた：偽物を作る、コピー商品を作るのだ。日本で殆ど知られていないVCDが中国で凄くはやっている。なぜならVCDのソフトがとても安く手にはいるから。例えハリウッドの最新映画でも、劇場公開前に映画館の入場券より安くVCDが販売されている。統計によると、現在中国のAV市場の95%は海賊版。北京・上海など大都会の有名量販店でも海賊版を取り扱っている<sup>39)</sup>。「辞海」と言う有名な辞書の新版が出版して2ヶ月、たくさんの図書市場で海賊版が次々見

39) 王喜凱・「打撃盜版有窮期」・『民主与法制』1999年第12号

40) 「懸重賞15万，新辞海捉盜版」・『華商報』・2000年5月27日

つかった<sup>40)</sup>。自由市場に行けば、世界中のブランド服と鞆が買える。いうまでもなく殆ど偽物である。

何より凄いのは直接偽札を作ることである。報道によると、今年4月から6月までの偽札摘発キャンペーンで、1,800件あまり、2億1,400万円（約27億8,000万円）に上る偽札が押収された<sup>41)</sup>。ここまで偽札が氾濫したら、貨幣に対する信頼は危機に瀕するだろう。実際、偽札に業を煮やした中央銀行は1999年10月からいままでのすべての偽造防止策を施した新札を発行した。ところが、新札を発行した途端、受け取り拒否が全国的に起こった。なぜなら、新札に対する偽札検定機がまだ開発されてなく、本物かどうか判断できないからなのだ。せっかくの新札が拒否されたら中央銀行はもちろん面目がない。そこで権威ある人物が言った：これは偽造のできない最新技術の貨幣で、私たちの知っている範囲ではまだ偽札を発見されてない。しかしこの発言が報道された数日後に、広州当たりで多額な新札の偽札が見つかったと報道され、その後次々、数十万円単位で見つけた<sup>42)</sup>。

ここまでになると、一体何を、誰を信じればいだろう、と首を傾けるが、お待ちかね、「民謡」がさらに教えてくれる：

十億人民九億騙、  
還有一億在鍛鍊。

「十億の人民中九億が詐欺師、あとの一億が修業中。」

表現がオーバーしていることは否定できないが、中国の今日の現実をある程度表せたといえる。新聞はコネで原稿を掲載し、金で特定の記事を載せ、記者はうわさで記事を書く<sup>43)</sup>。四川省の成都市と北京のあるところには公印偽造市場がある。私印から国務院の官印まで、見本があればなんでも彫ってくれる<sup>44)</sup>。上海のような大都会でもあちこちに「弁証」のチラシ或いはスプ

41) 『朝日新聞』2000年6月3日付けの報道による。

42) 「中国経済網」<http://www.xinhua-jjsj.com>などのネットニュースによるまとめ。

43) 木子・『新聞打假需重拳』・『民主与法制』1999年第17号

44) 『中国社会風俗事情』・白石和良著・蒼々社1996年



レー文字がある。つまり証明書偽造集団の広告である。2000年度国勢調査で大卒の学歴を持つ人が全国の実際の大学卒業生より60万人も多い——全国に60万の人が偽造の大学卒業証書を持っている<sup>45)</sup>。陝西省教育学院が地方の小・中学校の先生になった自称自校卒業生の卒業証書87枚を鑑定したところ、74枚が偽造であることが分かった<sup>46)</sup>。重慶市のある県の副県長は自らある会社の取締役になって、他の幹部とともに県経済委員会・重慶市計画委員会・重慶市人民政府の公文書を偽造して、他社から高額の手付け金を騙し取った<sup>47)</sup>。一時「中国民間人一の金持ち」とアメリカの「フォーブス」誌でも認めた卒業生の中には実は自転車操業で、ついに銀行の信用状詐欺罪で逮捕・起訴された<sup>48)</sup>。河南省の劉邦という60才の人は「中国国際銀行設立準備委員会」の名義で、4年間で全国数カ所に「支店」まで作り上げ、設立準備金としてたくさんの資金を集めた。そのために国務院をはじめ銀行設立するためのあらゆる監督官庁の許可書を偽造した<sup>49)</sup>。今はやりのIT産業、自称業界団体のCTC（中国競業在線）が行われた「中国インターネット優秀サイト人気投票」は実は全部インチキである。聴いたことのないサイトが人気サイトに選ばれ、まったく関係ない人がもっとも有名なネチズンに選出された<sup>50)</sup>。今年の前半だけで、広東省の武装警察部門が600台の偽軍用車を見つけた、しかも非常に精度の高い書類を揃えていて、とても見破りにくい<sup>51)</sup>。重慶市新華路電化卸市場では世界中あらゆるメーカーの電気製品のコピーが売られ、本物を脅かす存在になった<sup>52)</sup>。前文にも触れた歌手のコンサートでのクチパク行為……ここまで来たら「詐欺」が存在しないジャンルがないといえよう。

45) 「全国60万人持有假文凭」『商務早報』2000年10月5日

46) 「87份文凭竟有74份假冒」『華商報』2000年10月31日

47) 「副県長偽造公文」・『重慶晚報』・2000年6月27日

48) 「中国首富落網始末」・『北京晨報』・1999年11月1日

49) 「一狂徒偽造国務院批件，竟私建国际銀行」・『華商報』2000年6月14日付け、『北京青年報』による報道。

50) 浩天「吹破童年的肥皂泡——也談中国互聯網優秀網站評選」・『深圳商報』・2000年1月26日

51) 「広東武警横扫600假軍車」『廣州日報』2000年6月27日

52) 「重慶新華路 假貨猛於虎」『重慶商報』2000年10月16日

しかも庶民だけを騙すのではない。

一級一級往上騙、

一直騙到国务院。

「下の役所は上の役所を騙し、最後は中央政府を騙す。」

或いは：

村騙郷、郷騙県、一直騙到国务院。

「村は郷を騙し、郷は県を騙し、最後に中央政府まで騙す。」

村・郷・県などは全部行政単位である。つまり行政の間でも騙し騙されの関係なのだ。

今年3月、福建省統計局が「1999年度国民経済和社会発展の統計公報」を発表した。200を越える数字が並んだ。記者がその数字の信憑性を問いただしたところ、「幾つかの主な数字は比較的正確である」としか答えができなかった。それでも霞浦県は虚偽の4千万元以上の財政収入（県財政収入の3分の1強にあたる）を自ら削除したと、政治学習の成果として党の機関紙で披露した<sup>53)</sup>。中国の最優良企業として工業のモデルにもなった「大慶油田」は30数年間虚偽の原油量を中央に申告した<sup>54)</sup>……あげれば枚挙にいとまがない。

騙し騙されがここまでになったのは開放による拝金主義は一つの大きな理由だが、それだけではない。

600平米あまりの田んぼにお米7万キロ、小麦なら6万キロ、綿なら2,500キロ、芋なら60万キロが生産された、一株の白菜さえ250キロにもなるなど、このようなことを誰もただのホラとしか聞こえないが、これは中国共産党中央機関紙『人民日報』58年9月1日付けのれっきとした記事である<sup>55)</sup>。所謂農業の「衛星」を発射すると宣伝された。そのときから「浮夸風」（ほら吹き）の嵐が全国に吹き渡った。「人有多大胆，地有多大産」（どのくらいの勇気があれば、そのくらいの生産量がある）・「不怕做不到，只怕想不到。只要想得

53) 「統計数字可信否」・『中国青年報』・2000年3月6日

54) 『争鳴』2000年4月号が国家審計署（会計検査院相当）の発表による報道。

55) 「徐水人民公社頌」・『人民日報』1958年9月1日

到、一定能做到」(できないのは怖くない、怖いのは思いつかないだけ。思いついたら、必ずできる)など、当時のスローガンを見れば分かるように、すべてが狂った。数字をあげるだけで昇進できるから、みんなどんどんエスカレートしていった。

このような「浮夸風」(ほら吹き)は一時期影を潜めたが、最近また復活の兆候が出てきた。しかもバージョンアップして、下が嘘をついて上を騙すではなく、上が直接見せかけの数字を報告するようにと下に依頼するのだ。国が経済成長率を8%確保したいとする、ならば地方ごとにどのくらい確保するかを要求する。その地方もまた下級機関にどのくらい確保するかを迫る。仕方がないから、要求通りに数字を上へ報告する。ある村は1,200平米しか田植えをしてないのに、15,000キロの米が生産されたと上に報告した。なぜこのような嘘をつくかと記者が聞くと、「上からこの数字を要求されたから仕方がない」と村の幹部は平気で答えた<sup>56)</sup>。

政府・役人がここまで平気で嘘をつくなら、一般の国民に「誠実」・「正直」を要求しても無理。よって、この騙し騙されの現実はまだ暫く続くだろう。

### 5.5 先生は塩?

私の高校の恩師はいまある大学の教授をしている。数年前のある日先生は外出してどうしてもタクシーを使わなければならないことになった。タクシーは高いから普段もちろん使わないので、かなり決心して乗り込んだ。運転手は話しかけてきたので、大学で教えていると先生は答えた。それでタクシーから降りるとき運転手に「あなた先生っていまは大変だから、運賃はいいよ」と親切に言われた。先生は家に帰って、数日間気分が晴れなかった。なぜなら自分のプライドがずたずたにされたと思ったからだ。そう、そのとき大学の先生といえども月収はタクシー運転手の10分の1くらいしかないから、同情され、見下されても仕方がないのだ。私と会うたびに先生は苦笑いしながら「斯文掃地」(文人のプライドが地に落ちた)と自嘲する。

56) 呉昊「驚聞丹江口又放『衛星』」・『民主与法制』1999年第18号

このような中国の教員におかれた現実を「民謡」は次のように分かりやすく表現している。

教師像把塩，喫着有点咸，  
家々離不開，就是不值钱。

「先生は塩のようで、嘗めると少ししょっぱい。どの家も欠かせないが、所詮価値のないものだ。」

大学の教師はその額は別として、一応毎月給料を貰っている。地方の小・中学校の教師になると、月給の遅配・無配が日常茶飯事になっている。全国人民代表大会常務委員会の検査によると、99年全国3分の2の省で教師の給料の遅配が存在する。これは「中国教育報」などのマスコミに1999年10大教育ニュースの一つとしても選ばれた。ある記者が一つの県を調べたところ、その県のすべての学校は先生の給料を数ヶ月から1年以上に亘り支払われていない<sup>57)</sup>。もともと低いのに、支払わないならプライド云々より、生活ができなくなってしまう。その結果：

有能耐的去经商，  
有出息的去留洋，  
有后台的去当官，  
有毛病的去教书。

「才能のある人は商売する。賢い人は留学へ行く。コネのある人は役人になる。何もできない人は先生になる。」

私が昔勤めた大学でも数人の同僚が経済開放地区の民間企業などに転職した。田舎に行けば、職場放棄の小・中学校の先生が少なくない。殆どが南の経済開放地区へ出稼ぎに行った。他にできないことがない人はそのままどまっているが、雀の涙くらいの給料さえ貰えないし、生活さえできない、このような状況下では教育への情熱だけではやっていけるか。

そもそも中国政府は教育をどのくらい重視しているか、疑問に感じざるを

57) 石飛「先発教師工資，再発県長工資」、『中国青年報』2000年6月26日

えない。改革開放までの知識人を労働改造する、学校教育を否定するなどを別にし、改革開放後では鄧小平は「科学技術は生産力である」と号令して、教育と研究を重視する方針に転換したように見えた。「義務教育法」・「教師法」など法の整備もされ、先生の社会地位の向上も叫ばれ始めた。しかしその裏に小・中学校の学費・雑費などの色々な名目の費用徴収が盛んに行われ、その額は義務教育法が施行される前の数百倍、或いは数千倍になった（大学も同じ）。しかも義務教育法は「国の教育予算の増加は経常性財政収入の増加を上回らなければならない」と決められているが、法律施行以来、教育予算の増加が財政収入の増加を上回ったことが殆どなかった。「中国教育発展と改革綱要」が2000年まで公共教育費はGNPの4%に達せなければならないと決めしたが、1998年の実績は当年GNPの2.55%しかなく<sup>58)</sup>、教育費の急激の増加が望めない以上、目標の達成は絶望的である。

国が法律を無視している以上、地方政府に法に従えと命令してもあまり効き目がない。1998年全国半分以上の省が教育費を前年度より上回るどころか、逆に減少してしまった。しかも北京・上海のような経済的に恵まれた地域から甘粛・寧夏などのような貧困地域まで、財政事情とは関係ない<sup>59)</sup>。全く意識の問題である。

一方、金満学校も続出している。子供に未来を託されている人々はこぞって我が子を進学校に入れたがる。そのため、都市部の一部の有名進学校（いわゆる重点学校）は政府の予算に優遇されているだけではなく、後援費（賛助費）などあらゆる名目の雑費で保護者から金を巻き上げている。私の知っているある大学の話では、最近の「教師の日」に、大学側は現職の職員たちだけにのみ、一人あたり80元（約1,200円）の特別ボーナスを支給した。ところで、この大学の付属中学校（高校も含む）は定年退職者を含む、職員全員に一人あたり500元（約7,500円）も支給した。もっと驚いたのは、付属小学校は同じく全職員に一人あたり1,200元（約18,000円）も支給した。その小学校を見

58) 「1998年全国教育費執行情況公布」・『人民日報』1999年11月26日

59) 「1998年全国教育費執行情況公布」・『人民日報』1999年11月26日

学したら呆れてしまう。生徒寮にはエアコン完備、グラウンドはコンクリート(?! )で全面舗装され、教室の勉強机までクロスを敷いてるなど、まるで成金のような羽振りである。なぜならこの小・中学校は当地では有名な進学校であるからだ<sup>60)</sup>。

大勢の地方の学校が先生の給料すら支給できない一方、一部の都市部の学校は金の使い道まで困っているように見える、同じ国の同じ公立学校とは思えないほど差が開いている。これはいま中国の現実である。しかも教育だけの話してはない。

## 5.6 不倫も文明?

ついに出了、という感じで6月20日付けの「読売新聞」のある記事を読んだ。記事のタイトルも「愛人を禁ず」といういかにも中国らしい、或いは中国しかできないことらしいものである。内容は中国の広東省で「愛人防止法」が制定したとか。早速中国の新聞及びインターネットで調べたら、実は広東省高級人民法院・検査院・公安庁・司法庁が連合で「婚姻関係における違法犯罪行為及び財産等の問題処理に関する意見」という通達を出した。愛人を持つことが広がっているなか、離婚における財産分割などに明確な線引きを示し、愛人及び愛人作り側に利益が出ないようにすることで、愛人を持つ風潮に歯止めをかける狙いがあるようだ<sup>61)</sup>。

### 5.61 役人の新追求

なぜそこまでしなければならないのか。同報道によると、広州など3の市が公表した昨年の汚職事件のうち、100件あまりは関与していた役人全員が愛人を持っていたという。これは嘗ての中国ならおよそ狂言としか聞こえない話なのだ。これも改革開放の成果であろう。改革開放は外国資本を導入する

60) 恩師の蔡恒先生はこれらのカネ目当ての学校及び金満学校を「学店」と名づけた。

61) 『読売新聞』2000年6月20日付けの記事と中国のインターネットオンラインニュース検索サイトの記事によるまとめ。

だけではなかった。外貨が入ったら、その外貨を投資した人も入ってくる。人が入ってきたらその人たちが持つ「文化」・「文明」も当然一緒に入ってくる。「不倫」・「愛人」という嘗ての中国では厳しく取り締まられたはずの「文明」も香港オーナーなどと共に怒濤のように開放最前線の広州辺りに入り、瞬く間に全国に広がった。前にも触れたがこの数年、金など物質的に満足している成金及び幹部役人たちは、次の目標として、色欲を追求するようになった。その振る舞いは「民謡」が次のように歌っている：

送上煙酒不給弁，  
送上金錢推着弁，  
送上美女馬上弁，  
無錢無女靠辺站。

「タバコやお酒を献上しても何もやらない；札束を献上したら考えてやる；美女を献上したらすぐやる；金も女もないなら来るな。」

むかし役人に頼み事があれば、お酒とタバコ・缶詰などを献上したら殆どやってくれた。開放後、金を献上するのは常識になった。金も腐るほど手に入れたいまはやはり女が一番になってきた。

湖北省元副省長孟慶平の事件は典型的な例である。数人の愛人を持ち、権力を乱用して彼女たちのためにいろいろな便を図った。そして美女を献上した民間の会社に利益を与えたなど、その好色ぶりは一時の大きな話題になった。

「民謡」が彼らの生態を次のように表現している：

握着情人手，溫柔隨裁定；  
握着小秘手，美味如烈酒；  
握着野鷄手，刺激又顫抖；  
握着老婆手，左手握右手。

「愛人の手を握ると、いわれるまま；秘書の手を握ると、美味しい酒を飲めるようだ；街娼の手を握ると、刺激で体が震える；女房の手を握ると、左手と右手を間違ふ。」

## 5.62 結婚は誤り？

ここ20年間の開放政策で、中国人の観念・意識もかなり変わった。男女のこともそうである。1980年新「婚姻法」の施行、特に1989年最高人民法院の「人民法院が離婚案件の審理にあたって如何に夫妻双方の感情崩壊を確認するかに関する意見」の通達を出してから、いままで愛がなくなってもなかなか離婚を認めて貰えなくて、無理やり一緒に生活してきた人たちが、一気に離婚に走った。加えて遅ればせながらの性意識解放による男女関係の変化、市場経済の影にある愛人問題及び風俗などの影響で、離婚率は鰻登り。その凄じさは北京などの大都会では一時的に「離了嗎？」（別れたか）が挨拶代わりになるほどだった。統計によると、1998年北京の離婚率は27%を超え、上海は35%も超えた<sup>62)</sup>。3組に1組が離婚するとは恐ろしい。国民の結婚意識の変化ぶりが窺える。

事実、北京・上海などの大都会では日本と同様、結婚しない人、若しくは結婚しても子供はいらない人、中国流のいわゆる「新人類」が増えている。昔から種族の継承意識が強い中国では考えられないことである。このような「新人類」の出現の原因は、伝統的な「家族」中心の意識が、西洋の「個人」中心の意識に変化してきたといえよう。家族の、或いは集団の将来より自分自身の現在の幸せのほうが大事である。こういう変化がやがて婚姻関係から社会全体に対する意識へと広がるだろう。その広がりによって「全体主義の国」というラベルは外さなければならぬ日が近い将来、訪れるに違いない。

このようなはよりの婚姻意識は「民謡」で表現すると、かなり露骨になってしまう。

結婚是失誤，  
離婚是覚悟，  
再婚是謬誤，  
復婚是執迷不誤，  
生孩子是犯大錯誤，

62) 『中国統計年鑑・1999』・中国統計出版社・1999年のデータによる計算結果。



一人過甚麼都不耽誤。

「結婚は間違い、離婚は目覚め、再婚は誤り、復縁は頑迷だし、子供を産めるは大間違い、一人だけなら最高。」

こうなると「愛情」という言葉も空しく聞こえてしまう。

多情是優

無情是酷、

痴情是蠢

絶情是懂得世故。

「多情はアホ、無情はクール、痴情はバカ、絶情は世渡り上手。」

ほんとにこのままの社会になったら恐ろしいが、「民謡」のことだから、面白おかしく歌って、人の関心を引くのが役目なので、オーバーに表現することが多い。しかし、もしかすると、これは単に「愛情」の「情け」を歌うのではなく、普通の「情け」を言っていることかもしれない。前文の「十億人民九億騙、還有一億在鍛鍊」（十億の人民中九億が詐欺師、あとの一億が修業中）を連想すれば、恐ろしい。

### 5.63 道徳の乱れ

恋愛・結婚に関する「民謡」は次のようなものもある。

未成年做成年的事、

訂婚做分手的事、

恋愛做結婚的事、

結婚做再婚的事。

「未成年は大人のことをする、結納で別れの準備をする。恋愛で結婚のことをする。結婚で再婚のことをする。」

これは道徳の乱れを嘆いているのである。未成年なのに恋愛したり、肉関係になったりして、昔の成人でもなかなかできないことをする。結納するとき、もし別れたら財産などをどうするかを2人がキチンと話なければならぬ。離婚率の高さから見れば、それを念頭に置いた方が良からう。これも

中国人の実用主義の現れかもしれない。調査によると、北京市民の6割は婚前の財産公証（公証役場による）が愛情を冒涇するどころか、逆に愛情を守る重要な保証であると認めている<sup>63)</sup>。

「恋愛で結婚のことをする」というところは理解しにくいかもしれない。遠いむかし自由恋愛のない時代ではすべて親が決めて、結婚するまで2人が会うことも禁止されるのは別にして、最近まで中国では婚前の性行為は社会的にも、当事者の間にも許されなかった。しかしいま大都会では日本と殆ど差がないほど、自由奔放になってきた。やがて結婚にこぎ着いたら、第三者に目を向けてしまい、不倫したり、愛人を作ったりしてしまう。少し年を取った人から見ればとても不思議で、けしからんと思うだろう。

#### 5.64 愛人が多いほど恰好いい？

いまは何も愛人は金持ち或いは幹部官僚だけがつくる時代ではない。普通の人でもつくる、或いはその願望を抱いている。広州市白雲区の調査によると、「包二奶」（愛人を囲む）という現象はますます広がっている。少し前までは成金など金持ちのすることというイメージがあったが、いまは貧しい農村地域でも愛人を持つ風潮が蔓延しはじめた。「いくら貧しくても愛人を持たないと笑われる」と思い、少しでも稼いだら愛人のところに持っていき、妻と子供をほったらかしにしてしまう。そのため子供を学校に入れられない家庭まで現れるほどである<sup>64)</sup>。「民謡」によると愛人が多いほどいいらしい。

一人情人没有是废物，  
 三個二個不止是人物，  
 十個八個不足是動物。

「一人の愛人もいないのは無能，三人も四人もいるのは人物，八人も十人も足りないなら動物だ。」

只愛一人有点傻

63) 「六成北京人坦然接受婚前財産公証」『北京青年報』2000年11月15日

64) 「二奶現象氾濫 貧困地区也有人包二奶」『新快報』2000年8月28日

愛上兩個最起碼  
三個五個剛合適，  
十個八個才瀟灑。

「一人だけを愛するのはちょっとバカ，二人くらいなら常識，三人五人ならちょうどいい。八人十人こそ洒落だ。」

二つの「民謡」はややニュアンスが違うが，共通しているのは「愛人を持つ」こと，しかも何人も持つこと，これこそ洒落で大物らしい時代の申し子だ。

「不倫」という古くて新しい社会現象の「普及」レベルで言えば，中国ももう先進国入り？

## VI. 蛇足

改革開放以来中国社会の凄まじい変化，そして見事な経済成長及び民衆の生活レベルの向上（底上げ）は，誰も否定できない事実であり，新華通信社・『人民日報』や『中央テレビ』などが莫大な国家予算を費やして連日のように報道している。小生のような一庶民がそれらを敢えて言及しないことをご理解いただけたらと思う。

そもそも「完全なスターリン体制と民主主義には，風刺や小話は存在しない」，とロシアの哲学者ジノビエフが指摘した<sup>65)</sup>。旧ソ連といまのロシアにアネクドート（政治風刺小話）が流行っていると同じように，言論の自由が保証されてない，或いは民衆の意見を汲み上げるルートが完全でないかぎり，人々はこの手を使うしか鬱憤を晴らす手段がない。一日も早く中国にこの類の「民謡」のない日が訪れることを願いながらペンをおきたい。

65) 「朝日新聞」2000年6月20日付け夕刊「政治風刺」より